

TOPに聞く

有限会社吉岡土建・有限会社吉岡砕石／萩支部

廃棄物も地産・地消！エコの意義に今一度立ち戻って

吉岡 克巳

Katsumi Yoshioka
有限会社吉岡土建
有限会社吉岡砕石
代表取締役部長



これまでも行ってきたリサイクルなどエコの意義に、今一度立ち戻り、廃棄物の地産・地消ができないかと考えた阿武町の有限会社吉岡土建及び有限会社吉岡砕石 吉岡克巳部長。平成19年度「新分野進出モデル構築支援事業」に採択された「バイオマスエネルギー施設」構想について、今後の展望を伺いました。



有限会社 吉岡土建 有限会社 吉岡砕石 会社概要

創業 昭和43年
代表者 代表取締役社長 吉岡 正
従業員数 22名
営業内容 土木一式、建設一式、砕石
産業廃棄物処理
ガソリンスタンド、不動産

木くずリサイクル施設



リサイクル工場



■地元へ根ざし
その中で時流を読む

昭和55年に設立した(有)吉岡土建は、同時に関連会社として(有)吉岡砕石を設立、土木建築業のほかガソリンスタンドなど地元阿武町に根ざした事業を行ってきました。

■エコの意義を考えれば
自ずとやるべきことが
見えてきた

の事業も現在では大きな戦力となつていきます。

山口県でもここ3〜4年の間で積極的に取り組まれている「バイオマス発電」。木材、生ゴミ、家畜の糞などを燃料とし燃やすことで、電気や熱をつくり出します。もともと空気中の二酸化炭素を使って光合成をした有機物を燃料とするので、燃やしても二酸化炭素の総量は変わらず、廃棄物の有効利用にもなる、現在注目されているエネルギー利用です。

会社では、以前より現場の作業中に出た廃材を県内のバイオマス発電施設に運送していました。しかし、運送するのに逆にエネルギーを使ってしまうという矛盾点に、なんとか地元でエネルギーとして活用できないかと考え始めます。

「地元で出た廃棄物を地元でエネルギー化し、利用する。これこそが地産・地消として意味があると思いい、小規模でもいいのでバイオマスエネルギーを利用した施設をつくりたいと考えました。」と吉岡社長。平成18年度に(財)やまぐち産業振興財団の事業可能性評価委員会より評価を受け、町役場や地元の方々

と話し合いを進め平成19年度、建設業振興基金の「新分野進出モデル構築支援事業」に採択されました。

■バイオマスエネルギーで
地域の活性化を！

現在、さまざまな方面からアドバースを受け、話し合いを進めながら、構想を具体化させている最中とのこと。「県内のバイオガス発電施設では、蒸気を使ったスチームタービン式のもの为主ですが、できればガスタービンを採用したいと考えています。蒸気発電だと木材の10〜15%しかエネルギーを回収できないといわれていますが、ガス化することによって発電効率が25〜30%上がる。また予熱が出るので、それらも無駄なく利用したいんです。

機械を入れるだけなら簡単ですが、それをどう活かしていくかオンラインコストも含めて慎重に話し合いを進めています。まだまだ試行錯誤することばかりですが、将来的にはリサイクル工場や、地元の老人ホーム、温泉、魚の養殖などにもバイオマスエネルギーを利用できないかと、夢が広がりますね。」

地球温暖化やゴミ問題。私たちの目の前にある難問に取り組みながら常に地域の活性化を模索しておられる(有)吉岡土建。その積極的な姿勢に新しい未来を感じました。

「山口県の中でも山陰地域は、公共事業の減少がいち早く始まっていたんです。だから『なんとかせんといかん』と比較的早い時期から新しい事業に取り組み始めました。年々公共事業が減っていったので、今となってはうまくシフトしていったほうなのかなと思います」と吉岡社長。土木建築以外